

歴史主義的知識社会学の視座

千葉 芳 夫

知識社会学の実質的な基礎者はマンハイムであるとされている。だが、現在のところ、彼の理論はまだ十分には理解されていないように思われる。これは次のような事情に由るものである。一方では、マンハイムが、知識社会学はまだ始まったばかりであるとして、早まった体系化を避けていることが挙げられる。しかもこれは、歴史主義に基礎を置く考察方法に起因するものである。彼は、仮説命題から成る体系をまず作り出し、それを事実によって検証していく、という方法は採らない。彼の方法は、個別的な、具体的な事実の考察を通して、それを成り立たせている背後の連関を引き出す、というものである。それ故我々は、彼の論考の内に、個別的な事例についての言及と、原理的な問題についての考察との混在を見ることになるので

ある。だが、マンハイムの理論が断片的で、統一性をもたないものであるかのような印象が生じることには、解釈者の側にも責任がある。マンハイムの知識社会学についての議論には、彼の思想的、方法的基盤を十分には考慮していないか、あるいは、こうした基盤と理論内容との関連を明確には捉えていないものが多いように思われる。このような解釈の場合には、彼の理論は、解釈者自身の理論的枠組において捉えられることになり、彼の理論の全体を把握することは不可能となる。実際、彼の理論内容の全体に関して、統一的な解釈を提示しようとする試みは、ほとんど存在しないと言っても過言ではないであろう。

一

シモンズは、『カール・マンハイムの知識社会学』において、このようなむしろ例外的な解釈を試みている。彼は、マンハイムの知識社会学が解釈学的方法に依拠しているという点を中心として、マンハイム知識社会学を、統一性をもった理論として解釈しようとしている。解釈学的方法に着目するということは、確かに重要なことである。しかし残念なことに、シモンズはマンハイムの歴史主義的な思考基盤にはほとんど注意を払っておらず、このことからいくつかの誤解が生じている。方法論的前提と共に、歴史主義的思考基盤をも考慮に入れなければ、マンハイム知識社会学の全体像を把握することはできないであろう。

ある理論を理解しようとする場合には、又その理論の目的を捉えることが必要であろう。では、マンハイムの知識社会学は何を目的とするものであろうか。シモンズによれば、それは、異文化間の、あるいは異なった立場の間の相互理解を可能にするための理論の構築だとされる (*Social worlds*; p. 18, pp. 80-81)。細谷は、ワイマール体制下におけるイデオロギーの対立抗争の実践的解決を目指すことが、彼の意図であったとしている(細谷、一九五九、二四頁)。又、

徳永は、マンハイム知識社会学の最大の目的が認識批判にあった、と考えているようである(徳永、三頁)。マートンは、マンハイムの知識社会学を実質的及び認識論的の二部門から成るものと整理しているが(Merton, p. 494, 訳、四五頁)、シモンズは前者に、細谷と徳永は後者に注目していることになる。

だが、実質的な部門の目的は、むしろ、思想史あるいは精神史の理解にあったと思われる。それは、論文「歴史主義」において示された歴史の全体認識というイデーへの、知識社会学のアプローチと言えるであろう。この場合、思想は、孤立した思想家の頭から生み出されるものではなく、その時代の生の表現だと考えられていることを指摘しておかなければならない(His. S. 251, 訳、二七三—二七四頁)。理論的・体系的思想は、日常的な体験や思考との連続性において捉えられているのである。思想史の理解とは、この意味においては、それを歴史的な生の表現として理解することなのである。そして、認識論的部門も、この目的に従属したものと理解することができる。マンハイムの認識批判は、主要には認識の部分性の批判であり、彼は、時代の全体の認識——ある時代の生の全体的状況の認識——を得るために、このような批判を行なったのだと考

えられるからである。こう言ったからといって、別に三人の論者の見解を否定するつもりはない。だが、マンハイムの眼が、知識や思想を通して生に向けられているのだ、ということとは忘れられてはならないであろう。

二

知識の存在拘束性^①の理論は、マンハイム知識社会学の中心に位置するものである。では、この理論は、何を解明しようとするものなのだろうか。論文「知識社会学」の中でマンハイムは、知識の存在拘束性とは、社会過程が認識過程を方向づけ、更に認識の視座構造の中に構成的に入り込むことを意味するのだ、と説明している (Wis.: SS. 230-234, 訳、二九八—三〇六頁)。社会的要因あるいは認識者の立場が、歴史的・社会的認識の成果や理論の内に入り込む、というような表現は、彼の諸論文中の到る所に見出されるものである。このことは、彼の関心が認識の差異に向けられている、ということの意味している。つまり、知識の存在拘束性の理論は、知識に対する理論外的な要因の作用一般を問題とするのではなく、認識の差異の様相を明らかにし、その差異の原因を究明しようとするものなのである。だが、この理論に関しては、存在に拘束される知識とはどのようなものか、存在とは何を意味するのか、両者の関係はどのようなものと考えられているか、について更に立ち入った検討が必要である。

マートンは、マンハイムが存在拘束的な知識の領域や類型をはっきりとは規定しておらず、このことが彼の理論に曖昧さをもたらす一つの原因になっている、と批判している (Marton: pp. 496-498, 訳、四五三—四五五頁)。だが、知識を自然科学的なものと歴史的・社会的なものに二分し、後者のみが存在拘束的なものとする点では、マンハイムは一貫している。知識類型の問題として曖昧さが残るのは、歴史的・社会的知識であっても、抽象的で形式的なものには存在拘束的ではないのかどうか、という点だけである。確かにマンハイムは、ある所では、形式的・抽象的な知識が存在に拘束されないという意味のことを述べ (Pre.: p. 39, 訳、一四五頁, I. u. U.: S. 163, 訳、三〇三頁)、又ある所では、形式的知識といえども時代的狀況の影響を受けるのだと主張している (Wis.: S. 261, 訳、三四八—三四九頁)。しかし、このことを曖昧さとしてではなく、自然科学的知識、形式的な歴史的・社会的知識、形式的ではない歴史的・社会的知識という三種の知識類型が区別されているのだ、と解釈することもできる。この区別の基準は知識内容の差異

という点にある。自然科学的知識は、時代や立場が異なっても、本質的には内容に差異の生じない知識であり、形式的な歴史的・社会的知識は、時代によって異なりはするが、同一の時代においては立場による差異は生じない知識、形式的でない歴史的・社会的知識は、時代的にも立場的にも差異の生じる知識だと考えられている。そして、第二の種類の知識が存在拘束的であるかどうかに関して曖昧さが存在するということは、この理論の本来の対象が第三の種類の知識であることを意味している。^②

ところで、個々の知識内容の差異は、それ自体として問題にされるわけではない。マンハイムによれば、知識社会学は、個々の知識内容ではなく、ある集団の世界観の全体を対象とするものである(Pro.: S. 320, 訳、二二二三頁、I. u. U.: SS. 54-55, 訳、一六七—一六八頁)。ここで言われる世界観とは、具体的な、個々人の有するものではなく、研究者によって構成された、集団の世界観である。個々の知識は、世界観の傾向や性質を示すものとして、つまりその「表示的意味(Dokumentsinn)」^④によって解釈される(山口、一六一頁、Simonds, ch. 3)。立場による知識内容の差異は、世界観全体の差異を、特にマンハイムが「精神論的平面(die noologische Ebene)」と呼ぶ、認識の基底領域(諸前提)

の差異を示すものとして捉えられ、また、そこから説明されるのである。

三

次に、マンハイムの知識社会学において、最も議論が集中し、また批判の的ともなってきた、存在概念の考察に移ることにしよう。「知識社会学の問題」においてマンハイムは、知識と存在との関係を上部構造—下部構造の関係として捉えるマルクス主義の立場は一面的すぎるものだ、と批判している。世界観体系は多様なものであり、それを階級との一対一の対応関係において捉えることはできない。精神的立場と階級との間には、なんらかの媒介概念が考えられなければならない。マンハイムはそれを「精神層(die geistige Schicht)」と呼んでいるが、これが一つの世界観に対応する集団なのである(Pro.: S. 381, 訳、九七頁)。「知識社会学」において、思考モデルと親縁関係をもつ社会的統一体として挙げられている、世代、生活圏、宗派、職業集団、学派等が、この「精神層」に当るものであろう(Wis.: S. 237, 訳、三二〇頁)。そして、「精神層」が階級に帰属させられることによって、世界観と階級とが関係づけられることになる。このことは、精神的立場の多様な分化に対応

した、階級の内的分化という観点が要だ、という主張だと理解される。

マンハイムの知識社会学を、基本的には、マルクス主義の上部構造—下部構造の図式に従っているものだ、と解釈する論者もいる(Hartung, p. 18, Tonsor, p. 627)。だが、はたしてそうであろうか。彼は単に、階級の内的分化という観点を、マルクス主義の見地につけ加えたにすぎないのだろうか。この点に関して、シモンズも指摘する通り、マンハイムにおいては、社会的存在が意味的なものとされていることに考慮を払わねばならない(Simonds, pp. 41-42)。マンハイムは、下部構造も精神的なものだと考えており、このことが、マンハイムの立場とマルクス主義の立場との最も大きな相違点だと考えられる。だが、マンハイムの解枳者、批判者の多くは、このことにあまり注意を払わないか、あるいは、それを存在概念を曖昧にするものとして、又、マルクス主義からの後退として批判するかのどちらかである(樺、一二〇頁、新明、二八九—二九五頁、戸坂、二九六—二九七頁)。しかし、存在が意味的なものということが何を意味するのかを明らかにすることは、マンハイムの理論を理解する上で重要なことである。

社会的存在が意味的なものと考えられるのは、社会が間

主観的な意味によって構成されるものだという見解をマンハイムがもっていたからだ、とシモンズは理解しているようである(Simonds, pp. 18-19)。社会の間主観的、意味的構成という考えが、マンハイムにみられることは確かである。しかし、この見方がマンハイムの論文に現われてくるのは、一九二八年の「世代の問題」以降である。しかも、遺稿集である『文化の社会学』に収められた「精神の社会学をめざして」に到るまで、この視点は、断片的な論述の内に現われるに留まり、あまり明確に定式化されないままに終っている。こうしたことを考えれば、シモンズのような理解では不十分だ、ということになるであろう。^⑤

マンハイムは、「知識社会学の問題」の中で、シェーラーの存在と意味の二元論を次のように批判している。「われわれにとってもまた、存在と意味とは、現象学的に区別されている。しかし、全体把握にとっては、……この現象学的な二重性は、最終的なものとして実体化されることはできない」(Ph.: 333. 訳、五〇頁)。重要なのは、実在的なものが精神的なものに転化する原点を追求することである。「だが、この際、このように實在要因が理念的要因に転化するのを明らかにするために、最初われわれが實在要因として提出しがちなすべてが、完全に意味に無関係な『物

質的な』ものではないということに注意することが重要である。例えば、経済的領域、地理的所与を『物質的なもの』及び『自然的なもの』として把握する傾向が往々にしてある。第一の例に限って言うと、生命のまったく生物学的な底層としての『飲食衝動』だけが自然的なものであり、こういう底層が歴史の中に現われるのは、それが精神的諸関係の中に入り込み、したがって経済的な、あるいは他の精神的な秩序の形態を受け取り、ないしは、そのような秩序にとって重要になる限りにおいてだけだ、ということを忘れてはならない」(Pro.: S. 345, 訳、五三頁)。ここでは、存在が、まったく自然的なものと精神的なものとの二つの次元で捉えられている。自然的なもの、物質的なものは、歴史的・社会的規定性を帯びることによって精神的なものへと転化する。これが、存在が意味的なものであるということの、二番目の意味である。この場合には、存在とは、歴史的・社会的に規定された、そして、それ故、歴史的・社会的にその形態を変化させる自然的な諸力を意味するのだ、と理解することができる。

マンハイムはまた、上部構造と下部構造との関係を、本来相互的なものだと考えている(Pro.: S. 365, 訳、七八頁)。ここから、知識と社会的存在との関係を利害関係としてし

か捉えない、経済決定論的なマルクス主義への批判が生じる。利害関係は知識と存在との関係の一つのタイプではない。そして、より一般的な関係を示すものとして、「束縛関係(Eingekettsein)」という概念が提示される(Pro.: S. 378, 訳、九三頁)。利害と直接に結びつきうるのは、経済組織や若干の政治的観念だけである。そして、ある経済体制や政治体制に利害関係をもつ人々は、この体制に属する世界観体系に束縛されるのである。「おそらく、特定の芸術様式や特定の思考様式やある思想的立場が一つの世界観体系のうちに根ざしていることが、そして、この世界観体系が特定の経済体制や支配体制に属していることが指摘され、それによって次にはこの点から、どんな社会的階層がこの経済体制や社会体制の発生ないしは維持に利害をもち、また同時に、それに所属する世界像に束縛されているかが問われうる」(Pro.: S. 379, 訳、九四―九五頁)。ここで世界像による束縛と言われているのは、どのようなことであろうか。マンハイムは、「特定の経済様式を望む者は、同時にまた、これに属する世界を望む者だ」と述べているが(Pro.: S. 378, 訳、九三頁)、ここで言われている世界とは、ある人々にとって望ましい世界だと理解される。つまり、世界像による束縛とは、理念的なものによる方向づけを意味する

ものと解される。知識が自然的な諸力によって規定されるだけではなく、また、知識の内の理念的な力が自然的な諸力を規定する。上部構造と下部構造の関係が相互的なものだ、ということの意味は、このようなものである。

マンハイムは、しばしば、意志や意欲が認識を方向づけ、更にその知識内容の内に入り込む、という意味のことを語っている。ここで言う「意志」とは、集団の有するものであり、又、「無意識的な潜在的傾向」を意味するのだ、と説明されているが (Pro.: S. 381, 訳、九八頁)、この「意志」が、相互规定的な関係にある理念的なものと自然的な諸力とのいわば合力を意味するのだと理解されよう。そして、同じ時代に複数の「意志」が存在し、それらは、互いに闘争しあうものなのである。「……歴史のそれぞれの段階には、単に闘争しあっている、社会的に異なった利害を有する多数の階層だけではなく、これらの階層と共に、同時に種々の『世界意志』同志の闘争も与えられている……」 (Pro.: S. 379, 訳、九五頁)。先に挙げた「精神層」とは、同一の「世界意志」に支配される人々の集団だとされている (Pro.: S. 381, 訳、九七頁)。それは、階級の内的分化という観点から捉えられるだけではなく、又、互いに闘争しあう集団としても捉えられているのである。このことから

も理解されるように、知識の存在拘束性の理論においては、単なる集団への所属ということが問題になるのではない。

むしろ、集団間の関係を把握することが重要になるのである^⑥。そして、特に対立や闘争という関係が重視されているのである。このことは、マンハイムが、基本的には、社会を対立し闘争する諸集団によって構成されているものと考えていることを意味している。彼が諸集団の内で階級を最も重視することも、この点から理解されよう。そして、集団間の対立・闘争は、利害によるものであると共に、「意志」によるものとしても捉えられている。しかもマンハイムは、——多分、マルクス主義への批判の意味を込めて——後者を重視している。存在概念の第二の意味から、このような理解が導びかれる。

さてマンハイムによれば、「歴史が始まる場所は、徹底的に精神的である」 (Pro.: S. 365, 訳、七八頁)。歴史的・社会的諸事象を変化の相において捉えるのが、歴史主義の第一の特徴である。そして、それらが精神的なものとして捉えられるということは、それらが生の表現として捉えられているということの意味している。絶え間なく生成し、流動する生の表現であるからこそ、歴史的・社会的諸事象もまた、変化の相において把握されねばならないのである。

り、又、解釈学的方法によって把握されなければならないとされるのである。このように考えるならば、精神的なものの上部構造と下部構造とは、生の表現の異なった次元を示すものだと理解されよう。このように、存在概念の第二の意味の内には、マンハイムの歴史主義の特徴が明瞭に現われているのである。

四

存在概念の二つの意味に対応して、拘束性概念にも二つの意味が考えられる。存在が間主観的、意味的に構成された社会を意味する場合には、拘束性とは、ただ単に、意味の歴史的・社会的文脈の違い、つまり、思考前提の文化的な差異を意味するものとなり、それは何ら決定論的な意味合いは含まないものとなる。シモンズは拘束性概念を専らこのような意味で理解している。だが、この意味での存在や拘束性概念は、おおむね個人がある思考様式を身につけていく過程の考察において現われるものであり、そこでは、知識の差異はあまり考察の対象とはなっていない。

これに対して、知識の差異が生じる原因を説明しようとしている場合には、しばしば、認識が意志や意欲といった非合理的な力によって規定されているのだ、という説明が

なされる。これは明らかに存在概念の第二の意味に対応した拘束性の意味である。そして、「意志」による規定性は、認識過程の全体に及ぶものと考えられている。すなわち、「意志」は認識過程を方向づけるだけではなく、最も基本的なカテゴリーさえをも規定するものとされているのである (Wis.: SS. 235-236, 訳、三〇八—三〇九頁)。意識の世界がカテゴリーによって構成されるということを考えれば、このことは、意識の世界が、現実の世界をある形態で作りだそうとする力と同一の力によって構成されるのだ、ということを意味している。そして、このことを知識の差異という点から見れば次のようになる。ある集団がどのような問題意識をもつかは、その集団が置かれる社会的状況とその集団の「意志」によって規定され、又、この問題意識によって、その集団がどのような社会的現象に関心をもちかが決定される。関心の対象となった社会的現象は、その集団が有する思考前提から解釈され、世界観体系の内へ統合されることになる。同一の対象について異なった認識が成立するのは、解釈の諸前提が異なるからであるが、この思考前提の差異は、「意志」の差異によって生じる。これが拘束性の第二の意味である。

第一の意味での拘束性の見解が、第二のものとのよう

な関係にあるのか、ということとは、かならずしも明確なものではない。それは、あい争う集団から成る社会の全体の内に位置づけられたある集団の内部で起る過程の考察だとも理解しうるし、又、階級関係に基礎を置いた社会の把握とはまったく異なった視角からの考察だとも考えられるのである。これに対して、存在及び拘束性の第二の意味に従えば、知識の存在拘束性の理論をある程度体系性をもった理論として捉えることが可能となる。すなわちそれは、社会を階級関係に基礎を置いた諸集団の「意志」の闘争の場とみ、知識の差異や対立をこの「意志」によって説明しようとするものである。マンハイムの議論の大部分は、このように理解しうるものである。

だが、知識の存在拘束性の理論は、完成された理論ではない。特に「意志」概念の曖昧さに起因する欠陥は重大なものである。「意志」とは、理念的な力と自然的諸力とのいわば合力を意味するものであった。とすれば、ある集団の「意志」を捉えるためには、この両者の把握が必要となるであろう。しかし実際には、それはある集団の政治的傾向を意味するものとして、世界観体系の表示的意味解釈によって捉えられている。そして、このようにして捉えられた「意志」は、集団間の利害や支配といった関係に、それ

らについての立ち入った分析抜きで結びつけられている。「意志」の概念によってマンハイムは、理念的なものと自然的・社会的諸力とが交錯する領域を対象化しようとしたのだ、と考えられる。しかし、この点に関する考察は十分なものだと言い難く、このことから、例えば、「意志」と利害との関係といった問題が曖昧なままに放置されるという結果が生じているのである。

五

これまでの論述によって、知識の存在拘束性の理論の輪郭は示されたと思う。そしてこれは、この理論の範囲を厳密に限定することによって可能になるものである。知識類型について論じた所でも指摘したように、マンハイムの考察の内には、この理論の範囲に含まれるのかどうかが明確ではないものもある。それには、先に挙げた形式的な歴史的・社会的知識の他、以前とは異なった知識や思考様式（主に知識社会学的な思考様式であるが）の成立に関する考察も含まれる。この場合には、社会構造のある変化が、一定の知識や思考様式が成立するための前提条件として考察されるに留まっており、その説明もアド・ホックなものだという印象を受ける。又、マンハイムは、知識の社会的

存在への作用をも論じている（特に、イデオロギーやユートピアの社会的機能についての論述）が、この考察は、明らかに存在拘束性の理論の範囲には入らないものである。

しかし、知識社会学が知識と社会的存在との相互関係を究明するものであるとすれば（徳永、一頁）、このような考察も知識社会学の範囲に含まれることになる。論文「知識社会学」の冒頭でマンハイムは、知識社会学と知識の存在拘束性の理論とを等置しているが（*Wid. S. 329*、訳、二九七頁）、この主張にもかかわらず、存在拘束性の理論は、彼の知識社会学の一部を成すものとして理解されなければならない。つまり、マンハイムの知識社会学は、知識の社会的存在への作用の考察と社会的存在の知識への作用の考察という二つの領域に大きく区別され、更に後者は、知識の時代的差異を問題とするものと集団による差異を対象とするものとに区別される。この最後の領域に当るものが知識の存在拘束性の理論である、と本稿では考えてきた。そして、このようにこの理論の範囲を限定して捉えることは、この理論の理解にとっても、またマンハイムの知識社会学の全体の理解にとっても必要なことだと思われる。

ところで、知識の存在拘束性の理論は、知識の差異を説明するものであると同時に、集団的な生の理解をも目指す

ものである。なぜならば、「意志」とは、集団的な生の傾向を示すものに他ならず、そして、互いに闘争しあう諸「意志」の把握を通して、時代の全体的な生の状況が把握されることになるからである。更にマンハイムには、個々の集団的な生、あるいはそれらから成る時代の全体的な生の状況だけではなく、歴史的次元における生の状況を捉えようとする意図がみられる。これは、先に挙げた領域のうちの第二のものにおいてみられるものである。この把握がある程度の理論的基礎づけをもったものとして現われるのは、「時代診断学（*Zeitdiagnostik*）」の方法においてである。それは、概念の意味変化の内に、時代の変化を、つまり、その時点での歴史の傾向を捉えようとするものである。ここでは、歴史が一つの主体として措定され、表示の意味解釈によって、その主体の傾向が把握されるのだ、と考えられる。しかし、このような方法で歴史の傾向が捉えられるであろうか。マンハイム自身、歴史の傾向が一つの階層の運動傾向によって担われるのではないことは理解している。歴史の傾向は、さまざまな集団の運動傾向の、つまり、さまざまな「意志」の、合力の方向として現われるものである（*His. S. 296*、訳、三三三頁、*Pro. S. 375*、訳、九一頁）。知識の存在拘束性の理論においては、「意志」は、知識を規定

するものという側面において捉えられたが、ここではそれは、それが有する歴史的な力という側面において捉えられることになる。そして、「意志」概念においては、特に、理念的なもののもつ規定性という側面が重視されていたことを考えるならば、ここでは、理念の歴史的機能が問題となることになる。言い替えるならば、知識の社会的存在への作用と社会的存在の知識への作用とが相互に交わり合う領域が、ここで対象化されようとしているのである。だが、マンハイムが歴史の傾向を表示的意味解釈の方法で捉えようとしていることは、この領域の解明が十分には行なわれなかったことを示している。われわれはここに、マンハイム知識社会学の限界を、特に彼の解釈学的方法の限界を見てとることができるであろう。

このように、マンハイムの知識社会学は、意味の世界とそれを規定する力とが、又、それを超えて顕現する歴史的力とが交錯する領域を解明しようとするものなのである。彼の考察には限界があるとは言え、このことのもつ意義は見失なわれてはならないであろう。

註

① 存在拘束性という語は、Seinsgebundenheit と Seinsverbundenheit という二つの語に共通の訳語となっている。

の二語が同じ意味であるかどうかについて疑念を提起するむきもあるが、マンハイムが二つの語を厳密に区別していたとは考え難い。むしろ彼は、どちらの語を使用するかで迷っていたように思われる。とすれば、翻訳上の問題として二語を訳し分けることは可能であり、又、望ましいことかもしれないが、概念上の区別を行うことは不可能だということになる。又、これらの語には、存在(被)制約性とか、存在に制約されていることとかの訳語が与えられる場合もあるが、存在(被)拘束性という語の方が一般的であるという事情を考慮し、本稿では、二つの語に相当するものとして、存在拘束性という語を使用することにする。

② だが、自然科学的知識が本質的に変化しないものであるというのは、マンハイムの認識不足であろう。後には彼も、このことに気付いているが、そうであれば、自然科学的知識も存在拘束性の理論の対象となりうるであろう。マルケイは、このことのもつ認識論的意義に着目している。すなわち、マンハイムの「相關主義的認識論」は、自然科学にも適用するものだと考えられるのである(Mulkey, p. 16)。

なお、本稿では、紙幅の関係もあり、認識論的な部門について立ち入った考察は行なわない。

③ この点に関して、シモンズが、マンハイムの知識社会学においては、ある集団に帰属させられるのが、個々人の具体的な思考内容ではなく、認識の枠組み、あるいは諸前提であるとして、ランシマンやチャイルドのマンハイム批判に反駁を

試みているのは、正当なものである (Simonds, p. 123)。彼の理解によれば、ある世界観をある集団に帰属させることは、その集団の成員がその世界観を特徴づける諸前提を共有している、ということの意味するのである。

④ 表示的意味とは、ある主体が、文化的客観化物の内にそれとは意図せずに表現している、彼の全体的な態度や性格を意味するものである (Bei.: S. 109, S. 119, 訳「七四頁、八八頁」)。

⑤ マンハイムの考察が、社会や集団のレベルに留まっており、個人の(インター・パーソナルな)レベルには達していない、という指摘は、何人かの論者にみられるものである (Farberman, pp. 263-264, Remmling, p. 31, Wolff, pp. 546-547)。このことを考えれば、マンハイムがヴェーバーと同様に、社会を個人的行為者の有意味的な行為の網の目として捉えていたという、ハミルトンやマーチンデルの見解も同意し難いものとなる (Hamilton, p. 121, Martindale, 訳「下、四四八頁」)。

⑥ マンハイムの存在概念が、社会集団を意味するものから、社会過程を意味するものへと変化したという細谷の指摘は、簡単には受け容れられないものである。なぜなら、マンハイムにおいては、社会過程とは、多くの場合、個人間の関係として捉えられ、集団間の関係として捉えられている、と考えられるからである (細谷、一九五八)。

⑦ この方法に「時代診断学」という名称が与えられているの

は、『イデオロギーとユートピア』においてであるが (L. u. U.: S. 82, 訳「二〇五頁」)、意味変化への着目は、「歴史主義」以来、一貫してみられるものである。

引用文献

Farberman, H. A.: 'Mannheim, Cooley, and Mead', in Remmling, G. W. (ed.), *Towards the Sociology of Knowledge*, 1973, Routledge.

樺俊雄「知識社会学と歴史主義」『社会学研究会編『知識社会学』一九三二年、同文館、所収。

Hamilton, P.: *Knowledge and Social Structure*, 1974, Routledge.

Hartung, F. E.: 'Problems of the Sociology of Knowledge', in Curtis, J. W. (ed.), *The Sociology of Knowledge*, 1970, Gerald Duckworth.

細谷昂「マンハイムにおける存在概念の展開」『文化』二二二卷三号、一九五八年。

細谷昂「歴史主義的思考と知識社会学の論理」『社会学評論』三六号、一九五九年。

Martindale, D.: *The Nature and Types of Sociological Theory*, 1960. 新陸人他訳『現代社会学の系譜』上・下、一九七〇年、未来社。

Merton, R. K.: 'Karl Mannheim and the Sociology of Knowledge', in *Social Theory and Social Structure*, 1957,

The Free Press, 森東吾他訳「カール・マンハイムと知識社会学」『社会学理論と社会構造』、一九六一年、みすず書房、所収。

Mulkay, M. J.: *Science and the Sociology of Knowledge*, 1979, George Allen & Unwin.

Remming, G. W.: *The Sociology of Karl Mannheim*, 1975, Routledge.

Simonds, A. P.: *Karl Mannheim's Sociology of Knowledge*, 1978, Oxford Univ. Press.

新明正道 「知識社会学の諸相」『新明正道著作集 六』、一九七七年、誠信書房、所収。

徳永恂 「序論」『社会学講座1』、一九七六年、東大出版会、所収。

Tonsor, S. J.: 'Gnostics and Conservatives', *Social Research* 35, 1968.

戸坂潤 「知識社会学とイデオロギー論」社会学研究会編『知識社会学』所収。

Wolff, K. H.: 'The Sociology of Knowledge and Sociological Theory' in Curtis & Petras (ed.).

山口節郎 『社会と意味』一九八二年、勁草書房。
マンハイムのは次の略号で示した。

Bei. = 'Beiträge zur Theorie der Weltanschauungs-Interpretation' 1921-1922, in Wolff, K. H. (Hg.) *Wissenschaftssoziologie*, 1964, Luchterhand. 森良文訳「世界観解釈の理論への寄与」『マンハイム全集1』、一九七五年、潮出版社、所収。

His. = 'Historismus', 1924, in Wolff (Hg.). 稲上毅訳「歴史主義」『マンハイム全集1』所収。

Pro. = 'Das Problem einer Soziologie des Wissens', 1925, in Wolff (Hg.). 樺俊雄訳「知識の社会学の問題」『マンハイム全集2』一九七五年、所収。

I. u. U. = *Ideologie und Utopie*, 1929, G. Schulte-Bulmke, 第五版、徳永恂訳「イデオロギーとユートピア」『世界の名著 56 マンハイム オルテガ』一九七一年、中央公論社、所収。

Wis. = 'Wissenschaftssoziologie', 1931, in *Ideologie und Utopie*. 樺俊雄訳「知識社会学」『マンハイム全集2』所収。

Pre. = 'Preliminary Approach to the Problem', 1936, in *Ideology and Utopia*, Routledge. 高橋徹訳「英語版序文」『世界の名著 56 マンハイム オルテガ』所収。

(なお、訳文は適宜変更してある。)

(本学助手 社会学)